

令和6年度 公立小松大学入学者選抜試験
一般選抜（中期日程）試験問題

小論文

【国際文化交流学部】

国際文化交流学科

（注意事項）

- 1 問題用紙は指示があるまで開かないでください。
- 2 問題用紙は本文4ページです。答案用紙は2枚です。
- 3 答案用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入してください。
- 5 アルファベットや数字は、1マスに1字で記入してください。
- 6 字数制限のある解答については、句読点を1字と数えてください。
- 7 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

I. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

計算の力を借りて生来の認識を拡張していかない限り、ウイルスや氷床、気候や地球規模の生態系など、人間のスケールを圧倒的に凌駕した対象について、私たちは考え続けることができない。

実際、コンピュータを使って過去と未来の気候をシミュレートすることができなければ、そもそも地球温暖化という現実を把握することも難しいだろう。

夏の暑さは、コンピュータの助けを借りなくても実感できるが、少なくとも過去 6600 万年のうち最速のペースで二酸化炭素が大気中に蓄積していること、このままいけば産業革命前に比べて今世紀末には 4 度以上世界の平均気温が上昇するかもしれないということ、こうしたことを (A) 「肌で感じる」 のは不可能である。

気候やウイルス、あるいは地球規模の生態系など、人間のサイズを圧倒的に凌駕した広がりを持つ対象に着目し、これを「ハイパーオブジェクト」と呼ぶのは、アメリカのライス大学を拠点に独自の環境哲学を展開するティモシー・モートン (1968-) である。ハイパーオブジェクトとは、単に「大きなオブジェクト」ではない。地球温暖化は私たちの皮膚を焼き、地球規模に広がるウイルスは粘膜に付着してくる。(B) ハイパーオブジェクトは、不気味なほどじかに、私たちに張りついてくるのだ。

全貌が見わたせないほど巨大で、にもかかわらず身体に粘着してくるこうしたものたちが、人間中心主義を機能不全に追い込んでいるとモートンは説く。ウイルスに粘膜を侵され、うだる夏の暑さに皮膚を焼かれながら、私たちは人間 (human) を、人間でないもの (nature) から清潔に切り離すことが、不可能であることを思い知らされている。

デカルトは、体内に何兆ものバクテリアが棲んでいることを知らなかった。カントは、太陽から降り注ぐ 夥しい数のニュートリノが全身を貫通していることに気づかなかった。フレーゲは、自分のゲノムの一部が、古代のウイルス由来の配列で占められていることなど、想像するすべもなかった。

だが私たちはいま、自分の朝の発熱が、地球規模のパンデミックの局所的な現れかもしれないと感じる。今日の暑さが、生物の大量絶滅を引き起こしている気候変動の一部かもしれないと考える。こうして、いつも自分が、無数の異なるスケールの事物が錯綜する 網 のなかに編み込まれていると実感すること。これをモートンは、「エコロジカルな自覚 (ecological awareness)」と呼ぶ。

私たちはこれまで、宿主であるヒトの細胞に棲みつこうとするウイルスに対しては「出て行け」と要求しておきながら、みずからの宿主である地球環境は「発熱」するほど乱暴に扱い、他方で、仲間同士で「家にいよう (stay home) !」と呼びかけ合ってきた。一つの尺度では正義と見えることが、別の尺度で見るとまったく辻褄が合っていない。エコロジカルな自覚は、これまで自明とされてきた人間中心の首尾一貫した「世界」という観念を破り、いつも別の尺度があり得るという事実を、私たちに突きつけてくるのだ。

(中略)

ハイパーオブジェクトとの接触は、人間を自然界の頂点という「高み」から引きずり下ろし、人間でないすべてのものと同じ地平へと、「低く」降り立っていくことを余儀なくさせる。視線を大地へと下ろすその先に、新たな生の可能性が開ける。清潔で純粋な世界という幻想にしがみつ়くのではなく、不気味な他者とも波長を合わせながら、新たな現実へと感性をなじませていくのだ。

こうして、すべてを見通す高みからの視野という幻想から解き放たれるとき、一つの尺度に基づく「正しさ」や「確実さ」よりも、他者の存在に耳を澄ませ、これに生命として応答していく力こそが求められることになる。

(出典：森田真生『計算する生命』新潮社、2021年、203～205頁。一部改変。)

〔問1〕下線部(A)「肌で感じる」のは不可能である。」に関して、「肌で感じる」ことが不可能な地球温暖化の現実を、人間が把握することができるのはなぜか。本文を踏まえて100字以内で説明しなさい。

〔問2〕下線部(B)「ハイパーオブジェクトは、不気味なほどじかに、私たちに張りついてくる」とは具体的にはどのようなことを示しているか。本文中の言葉も適宜用いながら、100字以内で説明しなさい。

〔問3〕地球環境が不確実性を増すいま、私たち人間はどのような姿勢を持つべきであると考えるか。本文を踏まえながら、300字以内で自分の考えを述べなさい。

II. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

私はフィンランドの大学で、日本文化について教える仕事に就いている。授業に出席する学生の大半は、漫画やアニメ、文学作品や旅行を通じて日本に興味を持つようになり、日本の文化や社会についてもっと知りたいと思うようになった人たちだ。日本語が堪能な学生も多く、下手にアニメや漫画の話をしようものなら、彼らの方がよほど詳しいことも珍しくない。

ところで、日本文化とは何だろうか。新学期の最初の授業で、私はよくこの質問をする。すると、学生たちは「お寿司」「漫画」「お城」「着物」「桜」「茶道」などなどと答えてくれる。

しかし、それらはどれも、歴史の中で変化してきたものだ。江戸時代の寿司は、いま日本で食べられている握り寿司とはだいぶ異なる。だいたい、寿司といえは必ずしも握り寿司を意味するわけでもない。もともと中国の料理だったはずのラーメンがいつ、いかにして「日本」を代表する味になったのかについては既に多くの研究書がある。いまの振り袖や訪問着のような着物をもって「伝統」と言おうものなら、服飾史学者にため息をつかれるだろう。

それに何より、「日本文化」の中身がこのようなものだとしたら、それはかなりステレオタイプのだ（ステレオタイプ自体の是非は、今はおいておく）。壁に富士山や桜の絵が描かれ、着物が飾られたスシ・レストランがあったとして、「日本文化をわかっている」寿司屋だと思うだろうか。むしろ「こんなの日本じゃないよね」と感じるかもしれない。

翻って、日本で生まれ育ち、自らが日本人であることを疑ったことのない人々にとって、「日本文化」とは自明のものだろうか。「日本文化とは何か」と質問されて、「これがこのような理由で、紛れもなく日本文化である」と、自信とその自信にふさわしい知識を持って答えられる人がそれほど多くいるとは思えない。それに「文化」という語それ自体が、かなり曖昧で、様々な意味を持たされている。「日本」も「文化」も、状況を無視して取り出したら、その言葉自体の意味と内容はかなり曖昧だ。

しかし、人々が何かを日本文化と見なすときに前提とされているものや、人々が何かを日本文化と見なすことで成し遂げていることなら、限定されていて観察可能だ。

先日、私は「日本のお正月」について質問された。私の父は在日コリアンなので、私が幼い頃に体験した「お正月」は、在日コリアンの親族の集まる法事と同義だった。それに、もし父がアフリカ系で、私の外見が「日本人」らしくなかった場合、質問者はそれでも私に同じ質問をするだろうか。

「日本のお正月とはどのようなものですか」という質問に、ごく自然に回答するとき、あるいは曖昧に笑って「うちでは日本の伝統的なお正月をしているわけではないので」とお茶を濁すとき、私たちは「日本文化」を実践している。それは「日本文化」について答えるべき人間は誰かという選定と、日本文化について質問し答える作業の中で何が行われるべきかという規範のセットによって成り立っている。そのセットとはいかなるもので、いかにして成り立っているのか。そのように問うことは、「日本」「日本人」「日本文化」なるものの漠然とした中身

にではなく、ときに明確に現れるその境界線に目を向け、その前提を問うことを導く。

この発想は、私のオリジナルでも何でも無い。むしろ日本文化論の中ではとっくの昔に言われたことだ。「菊と刀」で、著者のルース・ベネディクトは「われわれがものを見るときに必ずそれを通してする (A) 眼球を意識することは困難である」と書いた。ベネディクトが、歴史を経ても変わらないと想定したはずの「日本文化の型」や、例として挙げたものの多くは、2020 年代の今、もはや古びてしまった。しかし、彼女が行おうとしたこと、すなわち「眼球を意識する」方法は、まだ有効性を失っていないように思われる。見られる対象ではなく、何かを当たり前のようにみなしたり、ある時は奇異なものとして見たりする、その「眼球」のほうに注意を向けると、その「眼球」が当たり前すぎて見落としているさまざまな前提もあれば、無視していることにすら気がついていないものもあることに気がつくかもしれない。

私自身が「フィンランド」を見るとき、無意識に前提としてしまっているさまざまなものがある。初めてフィンランドに着いた時、私は真っ黒な肌をした近所の自転車屋さんが流暢なフィンランド語を操るのに驚き、私も努力してフィンランド語を習得しようと思った。けれども、あの自転車屋さんはフィンランド国籍者だったかもしれないし、移民二世だったかもしれない。(B) 私は、私に「日本のお正月」について質問する人と、何も変わらない。

教壇で口に出したことはないが、私は、「日本」「日本人」「日本文化」の中に、ある時は無理やりに入れられ、ある時は無理やりにそこから追い出される、そのような人々とその状況とに、「日本社会」を学ぶ学生たちが目を向けてほしいと願っている。その現象もまた、和食や漫画や城の研究と同じくらい、明らかにする意義のある (C) 「日本」や「日本人」、「日本文化」 の姿であると。

(出典：朴 沙羅「「日本文化」とは？という問い 自分の「眼球を意識する」難しさ」
朝日新聞 2023 年 10 月 12 日)

[問 1] 下線部 (A) 「眼球を意識する」に関して、ここでの「眼球」は何を喩えた表現であるか。本文中の言葉を用いて、50 字以内で答えなさい。

[問 2] 下線部 (B) 「私は、私に「日本のお正月」について質問する人と、何も変わらない」に関して、筆者がこのように述べる理由を、100 字以内で説明しなさい。

[問 3] 下線部 (C) 「「日本」や「日本人」、「日本文化」」に関して、本文を踏まえたうえで、「日本」「日本人」「日本文化」を理解するうえでどのような視点を持つことが重要であるか、また、なぜそのような視点が重要であるかについて、300 字以内で自分の考えを述べなさい。